



代表幹事に就任して
国立がん研究センターがん対策研究所予防研究部
井上真奈美

この度、永田知里先生からバトンを引き継ぎ、代表幹事を務めさせていただることになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。

本研究会に入会したのは医学部卒業後間もなく、疫学、しかも循環器疫学を始めてまだ1年位の若武者修行中であったことを思い出します。早速ニュースレター（当時はニュースキャストと記憶）の記事執筆の指示があり、何を書いたかも記憶にありませんが、わくわく意気揚々としていたことだけは覚えています。よい意味で無責任なこの時期に、ほとんどはお酒の席でしたが、様々な大御所会員の先生方から疫学の考え方やその本質、疫学者としての生き方、さらには人生論まで、ありがたく拝聴しておりました。お酒の席に通ったおかげで（笑）、その後幸運にも愛知県がんセンターの研究職を得ることができ、記述疫学と分析疫学を柱としたがん疫学研究の修行を本格的にスタートしました。その後、愛知県がんセンターで10年（うち1年は米国留学）、国立がんセンター・国立がん研究センターで10年、東大寄附講座で5年を過ごし、現在の国立がん研究センターに至っています。

その間、様々な大御所先生方が放った印象的な言葉が今の私の疫学者としての考え方を支えています。そのうちでも特に心にささっている言葉がいくつかあります。一つは「疫学とは生き様（いきざま）学である」ということ。確かにその通りです。観察研究では、対象者の習慣や行動はコントロールできません。最終的には対象者本人のご希望による生き様を見守り、どのような健康事象に結びつくのかを客観的に分析するのが疫学者の努めです。がん予防に向けあれやこれや指導するのも「おせっかい」ですが、それを受け入れるのも対象者ご本人の希望であり、強制とは無縁です。私はこの生き様学が大好きです。

もう一つは「天地人」、すなわち「天の時、地の利、人の和」です。今の境遇は、いいタイミングでたまたま居合わせた人や場所があったからこそつくることのできた幸運と解釈しています。また、これまで様々な職場に赴任したタイミングで地の利や人の輪を通じて、研究を思いがけない方向に発展できたことも、まさに天地人の幸運であったと認識しています。日本がん疫学・分子疫学研究会は、疫学の知識のみでなく、疫学者としての心を形成するためのベースとして、長きにわたって自身を支えている重要な礎です。意見が合わなくても、その意見をぶつけ合い、本質を語り合う場所があることが大切です。これは今後も脈々と引き継がれてほしいと思っています。

今回その代表幹事の役務を担うのも自身の成長の重要な機会と捉えて、務めを果たしたいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。